様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８０９１３

研究課題名（和文）いじめの連鎖：ピアプレッシャーに敏感な傍観者層はなぜ形成されるのか

研究課題名（英文）A chain reaction of bullying incidents; Why is a bystander sensitive to what peers think?

研究代表者
西野　泰代（Nishino, Yasuyo）

広島修道大学・健康科学部・教授

研究者番号：４０６１０５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、規範意識を持ちながらも、いじめ加害あるいはいじめへの加担をする子どもの存在に着目し、いじめが発生する心理的プロセスについてマイクロ（個人）とマクロ（集団）の両側面から検討をおこなうことによりいじめの予防策について考えることを目的とした。小学4年生から中学3年生を対象に、3年間で計7回の質問紙調査を実施した結果、いじめの負の連鎖（加害者と被害者が入れ替わるような状況）に学級風土が関わっている可能性や、いじめ場面で見て見ぬふりをする傍観行動をピアプレッシャーへの敏感さや同調傾性、moral disengagement（自分に都合の良い解釈をする傾向）が予測する可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：From a social-ecological perspective, bullying is influenced by bidirectional interaction between individuals and the multiple systems in which they operate. The purpose of this study was to investigate how personal characteristics such as moral disengagement and perceived peer pressure and classroom climate were related to bullying, especially bystander behaviors (remaining passively aside and not intervening). About two thousand and four hundred Japanese primary and middle school students (from 4th to 9th grade) participated in our questionnaire survey. Begun in the autumn of 2014, the study has involved four-months interval data collections for three years. Findings provides empirical support for the moderating effect of classroom climate on the relationship between moral disengagement and bystander behaviors in early adolescence. For middle school students, classroom climate might buffer the negative influence of moral disengagement upon the passive bystander behaviors.

研究分野：教育心理学

キーワード：いじめ　傍観行動　ピアプレッシャーへの敏感さ　moral disengagement　学級風土　同調傾性　自己有用感

１．研究開始当初の背景

いじめによる生徒の自殺が後を絶たず、いじめを予防する取り組みは学校現場だけでなく、家庭や地域、社会をも巻き込んだ重要な課題となっていた。応募者は、研究を開始する前年に、いじめによるとみられる中学生の自死を調査する委員会のメンバーとして、「いじめは起きるべき環境で起きる」という事実にあらためて直面した。すなわち、いじめの加害者と被害者という二者関係の中だけでいじめが起きるのではなく、その二者とその二者を取り巻く環境との相互作用の中でいじめは引き起こされるという事実であった。そのため、いじめに対する効果的な予防や介入について議論するためには、子どもたちの個人レベルでの変数と子どもたちが置かれた環境という集団レベルでの変数、そしてその両者の交互作用について実証的なデータに基づいていじめの問題をとらえる必要があると考えられた。

２．研究の目的

本研究では、‘moral disengagement’をキーワードとして、規範意識を持ちながらも、いじめ加害あるいはいじめへの加担をする子どもの存在に着目し、いじめが発生する心理的プロセスについてマイクロ（個人）とマクロ（集団）の両側面から検討をおこなうことによりいじめの予防策について考えることを目的とした。最終的に、いじめの負の連鎖を断つための学校介入プログラムの作成を試みることにより、学校現場での教育的介入に資する知見を提供することを目指した。

３．研究の方法

いじめ経験（加害・被害・傍観・仲裁）について、従来のいじめ(traditional bullying)とネット上でのいじめ(cyber bullying)の両面から子どもたちの実態を調査した。小学４年生から中学３年生（各学年400名）の児童生徒を対象として３年間で計7回の調査を行った。第１回調査時点で小学4年生および中学１年生の児童生徒については3年間の縦断データを収集した。第１回調査時に調査対象者たちの学級担任に対しても質問紙調査を実施した。調査は教育委員会を通じて各学校長に研究の趣旨を説明したうえで同意の得られた学校に対して実施された。学校を通じて保護者に対する調査依頼書と質問紙を配布し、児童生徒はそれを持ち帰ったうえで、調査への同意が得られた場合のみ家庭において回答し、封筒に入れて厳封したものを学校で回収する方式を採った。学級担任についても調査への同意が得られた場合にそれぞれ個人が封筒に入れて厳封したものを学校で回収した。質問紙調査により、自己効力感や自己価値、moral disengagementなどの個人的要因、教師の態度や学級風土、友人との関係、集団的有能感などの社会心理学的要因、関係的進行的要因を測定した。

４．研究成果

① いじめの負の連鎖を予測する要因：

小学４年生から中学３年生を対象としていじめの加害と被害についてそれぞれどちらか一方だけを経験した者と双方を経験した者、そしていずれも経験していない者というそれぞれの経験の違いを予測する要因について学級風土に注目して検討を試みた。

いじめの加害と被害の双方を経験した者‘bully-victims’は男女ともに小学生より中学生に多く、また、小中学生ともに‘bully-victims’における男女の割合はほぼ拮抗していることが示された。さらに、中学生女子では、被害のみ経験群よりも加害被害両方経験群のほうが全体に占める人数の割合が高いことが示されており、中学生女子においていじめの負の連鎖（加害者と被害者が入れ替わるような状況）が深まっている可能性が考えられた。

学級風土との関連について、いじめの加害と被害の両方を経験した群では加害も被害も経験していない群に比べて小中学生ともに学級の規則正しさと学級担任のいじめに対する呼応性について否定的に評価していることが明らかになった。また、中学生においてのみ、いじめの加害と被害の両方を経験した群では加害も被害も経験していない群と比較して教師からの自律性支援や教室内での人間関係の良さが低く評価されていることが示された。これらの結果から、小中学生ともに学級内で規律がきちんと守られることや教師がいじめに対して真剣に向き合うことがいじめの加害と被害の両方を経験する子どもを減らすことにつながり、子どもたちのいじめの負の連鎖を断つことになる可能性が示唆されたといえる。

② いじめ場面における傍観者の行動を規定する要因：

いじめ場面で傍観者がいじめを促すような行動を多くとる学級ではいじめが頻発し、周囲にいる者たちが被害者を助けようとする傾向にある学級ではいじめがさほど起こらないといった研究が報告され(Salmivalli, Voeten, & Poskiparta, 2011)、いじめの重篤化に傍観者の動向が大きく関わることが明らかになった。その一方で，仮想場面でほとんどの子どもがいじめ被害者を助けようとする意図を示したにもかかわらず、実際に被害者を助けた子どもは稀だったことが報告され(Rigby & Johnson, 2006)、いじめ場面で傍観行動が起きる背景について様々な側面から検討が進められている。本研究では、いじめ場面で見て見ぬふりをする傍観者の行動にmoral disengagement（「人に迷惑をかけるような人は、仲間はずれにされてもしかたない」と考えるようなこと）やピアプレッシャーへの敏感さ、仲間への同調傾性といった個人レベルの変数と学級風土など集団レベルの変数がともに関わっている可能性に

注目した。これらの変数の交互作用についてマルチレベル分析を実施したところ、「自然な自己開示が高い学級では低い学級に比べてピアプレッシャーへの敏感さが傍観行動を促進する程度が低減されていること」「いじめ否定学級規範の低い学級では、moral disengagement の高い子どもたちが傍観行動を起こしやすい」「教師による自律性支援の低い学級では、仲間への同調傾性や共感性の低さが moral disengagement を促進しやすい」といった結果が示された。これらのことから、いじめ場面で見て見ぬふりをする傍観者を減らすためには学級風土に着目をしたアプローチが必要であろうと考えられる。

③ いじめ場面での傍観行動の生起に関する発達的差異：

いじめ場面での傍観行動を類型化したのち、ピアプレッシャーへの敏感さとそれを規定する要因を指標として、いじめ場面で傍観行動が起きる背景について学校段階差に注目して検討した。

「いじめに一度も気づいたことがない(a)」「見ているだけ(b)」「何もしないが，被害者を助けるべきだと思う(c)」「被害者を何とか助けようとする(d)」）という 4 タイプの傍観行動それぞれに該当する小中学生の人数について χ^2 検定を行ったところ有意差が示され(χ^2 (3)=75.78, p<.001)、調整済み残差検定により中学生では小学生に比べて有意に(d)の人数が少なく、(a)(b)(c)に該当する人数が多いこと、見て見ぬふりをしながら内心に被害者を助けたい葛藤がある子どもが有意に多いことが示された（いずれも 1%水準で有意）。さらに、学校段階と傍観のタイプ別による分散分析を行ったところ、ピアプレッシャーへの敏感さ、自己有用感、援助要請、共感的関心といった個人特性と傍観行動との関連が示唆された。

青年期前期の子どもがものごとの捉え方や行動に仲間からの影響を大きく受けるのは親からの心理的離乳を経て自立した大人になる過程での通過点のようなもの（Steinberg & Silverberg, 1986）と考えられているが、本研究の結果からも小学生に比べて中学生ではいじめ場面で見て見ぬふりをする傍観行動が有意に多く、その背景にピアプレッシャーへの敏感さがあることが示された。また、小中学生ともに共感的関心の低さがいじめを正当化する可能性が予測され、さらに、中学生では，自己有用感（必要とされる感覚）の高さと援助要請の高さが仲裁行動につながる可能性が示されたことから、いじめの低減に向けて、子どもたちの自己有用感や共感的関心を育み、援助要請しやすい環境を作る必要性が確認された。

④ 従来のいじめとネットいじめとの関連：

対面上でおこなわれる「従来のいじめ」と比較しながら、日本の文化と社会の中で起きている「ネットいじめ」に顕著にみられる特徴について実証的な検討を行った。

小学 4 年生から中学 3 年生を対象として、従来のいじめとネットいじめ双方の経験頻度をたずね、それぞれに該当する人数について χ^2 検定および調整済み残差検定を行った。その結果、従来のいじめで加害と被害のどちらも経験した者がネット上でのいじめを経験しない可能性は有意に低く、ネット上で加害と被害のどちらのいじめも経験する可能性が有意に高いことが示された。これにより、現実場面でのいじめの延長線上にネットいじめが存在する可能性は否定できず、子どもたちのいじめ問題を考えるうえで，従来のいじめとネットいじめを切り離して考えるのではなく、どちらをも包含するモデルを構築して検討する必要が示唆された。

次に、従来のいじめとネット上のいじめでは加害経験を予測する個人特性に相違があるかどうかについて検討した。いじめの加害経験の有無による t 検定の結果、従来のいじめでは、加害経験のある子どもたちは経験のない子どもたちに比べて有意に自己価値、視点取得、共感的関心の各得点が低く、かつ、ピアプレッシャーと moral disengagement の各得点が高いことが示された。一方で、ネットいじめについては、加害経験のある子どもたちは経験のない子どもたちに比べて有意に moral disengagement の得点が高く、視点取得の得点が低いことが示された。これにより、従来のいじめに比べて、ネット上のいじめについては、これまでの研究においていじめ加害との関連が明らかにされてきた個人特性に注目した予防や介入の方策では対処できないような状況が存在する可能性が推測された。この結果は、「匿名性」「不可視性」といった特徴をもつネット空間において、対面上に比べてより一層モラルや社会的情報解釈の問題がクローズアップされる可能性が高いことを示したといえる。

⑤ いじめに対する効果的な介入や予防に関する知見：

今回の科研費助成研究において調査協力をお願いした市では、教育委員会の指導体制のもと、いじめ低減を目指して市全体で子どもたちの「自己有用感」を高める取り組みを 2015 年度より開始した。そこで、本研究では 2015 年度に実施した 3 回の調査において、子どもたちの自己有用感を測定し、その推移といじめ経験との関連について検討した。

Figure 1 は 4 か月間隔で 3 時点（T1: 6 月(1 学期)、T2:10 月(2 学期)、T3:2 月(3 学期)）における自己有用感とピアプレッシャーへの敏感さの各得点を示したもの、Figure 2 は同じく 3 時点でのいじめ加害経験率を示したものである。

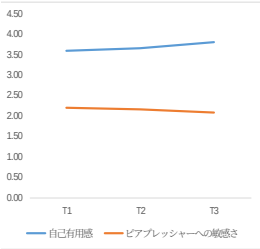

Table 1 自己有用感とピアプレッシャーへの敏感さ得点の推移

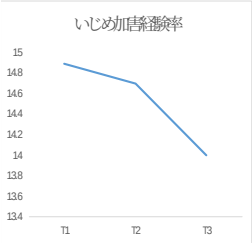

Table 2 いじめ加害経験率の推移

今回の調査では教室での一斉回答ではなく、持ち帰りによる個別自由回答であったため、調査対象校に在籍するすべての生徒が回答したわけではない。しかしながら、小中学生（小学 4 年生から中学 3 年生）ともに、1 年間で、自己有用感が緩やかに上昇し、一方で、ピアプレッシャーへの敏感さが緩やかに下降していることが明らかとなり、また、いじめ加害経験率（いじめ加害経験者数を回答者数で割った値）が低減したことが示されたことにより、自己有用感を育む取り組みはいじめ低減に何らかの効果をもつ可能性が示唆されたといえるかもしれない。

国立教育政策研究所(2015)は、「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながるであろう」と推察しているが、子どもたちが、「他人のために、自分から進んで協力することができている」と思えることが、「今の自分のままでいたいです」と自らを肯定的にとらえられることにつながり、それによって他者を攻撃することが減り、また、周囲の同調圧力に流されないような「強さ」を身に付けられるという可能性は否定できないかもしれない。

（引用文献）

国立教育政策研究所（2015）．生徒指導リーフ「自尊感情」？ それとも、「自己有用感」？ Leaf. 18 生徒指導・進路指導研究センター

Rigby, K., & Johnson, B. (2006). Expressed readiness of Australian schoolchildren to act as bystanders in support of children who are being bullied. Educational Psychology, 26, 425–440.

Salmivalli,C., Voeten,M., & Poskiparta,E. (2011). Bystanders matter: Associations between reinforcing, defending, and the frequency of bullying behavior in classrooms. Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology, 40, 668-676.

Steinberg,L., & Silverberg,S. (1986). The vicissitudes of autonomy in early adolescence. Child Development, 57, 841-851.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

① 西野泰代（2014） いじめ被害といじめ加害の立場の流動性に関する検討． 修大教職フォーラム，第 6 号，11-18．

② 西野泰代（2014） 中学生の逸脱行為に対する保護要因の検討． 広島修道大学論集，55 巻，第 1 号，1-14．

③ 西野泰代（2016） いじめの負の連鎖を予測する要因についての検討． ひろみら論集，創刊号，43-52．

④ 西野泰代（2017） 仲間への同調傾性といじめ経験との関連について． 広島修道大学論集，57 巻，第 2 号，33-45．

⑤ 西野泰代（2017） 学級で「大切にされる」感覚といじめ経験との関連． 広島修道大学論集，58 巻，第 1 号，13-23．

〔学会発表〕（計　１５　件）

① Nishino,Y.（2015）Bystander behavior in bullying: The role of personal characteristics and perceived peer pressure. 14th European Congress of Psychology.（口頭発表）

② 西野泰代（2015）いじめ場面における傍観者の行動を規定する要因 ― 個人特性を指標とした検討 ―．日本教育心理学会第 57 回総会ポスター発表

③ 西野泰代（2015）諸外国の学校におけるいじめ問題．日本健康心理学会第 28 回大会シンポジウム話題提供

④ 西野泰代（2015）ネットいじめの現状および学級風土との関連についての検討．日本心理学会第 79 回大会ポスター発表

⑤ Nishino,Y.（2016）The moderating effect of school climate on bystander behavior in bullying. 24th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development.（ポスター発表）

⑥ Nishino,Y.（2016）A multilevel study of individual characteristics and classroom climate in explaining bystander behavior in bullying situations. 31st International Congress of Psychology.（ポスター発表）

⑦ Harada,R., & Nishino,Y.（2016）Fundamental Research on Cyberbullying (1): Who Gets Involved in Being a Cyberbully?. 31st International Congress of Psychology.（ポスター発表）

⑧ 西野泰代・若本純子・原田恵理子（2016）児童生徒のコミュニケーション・トラブルの予防に向けて(1) ―現実場面のいじめ経験とネットいじめを予測する要因―．日本教育心理学会第 58 回総会ポスター発表

⑨ 西野泰代（2016）学校におけるいじめ問

題に関する国際比較．メンタルヘルス関連三学会 合同大会　シンポジウム話題提供
⑩ 西野泰代・原田恵理子・若本純子（2017）いじめ場面での親密度の違いによる傍観行動の生起と罪悪感．日本発達心理学会第 28 回総会ポスター発表
⑪ Nishino,Y.（2017）A multilevel study of individual characteristics and classroom climate in explaining moral disengagement in bullying. 18th European Conference on Developmental Psychology.（ポスター発表）
⑫ Nishino,Y.,　Kanetsuna,T.,&　Toda,Y.（2017）Which class is the most urgent to be intervened? Bully/victim ratio comparison. 18th European Conference on Developmental Psychology.（シンポジウム話題提供）
⑬ 西野泰代（2017）教師の認知と生徒のいじめ経験との関連：教師の効力感と学級風土を指標とした検討．日本教育心理学会第 59 回総会ポスター発表
⑭ 西野泰代（2017）「ネットいじめ」の特徴－従来のいじめとの比較から見えてくるもの．日本教育心理学会第 59 回総会シンポジウム企画及び話題提供
⑮ 西野泰代（2018）いじめ場面での傍観行動の生起に関する発達的差異についての検討．日本発達心理学会第 29 回総会ポスター発表

〔図書〕（計　1　件）
氏家達夫・島義弘・西野泰代、北大路書房、個と関係性の発達心理学　2018

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
西野 泰代　（NISHINO, Yasuyo）
広島修道大学・健康科学部・教授
研究者番号：40610530

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）